

柘植地域

まちづくりだより

第318号

発行

柘植地域まちづくり協議会事務局
三重県伊賀市柘植町一〇六四七番地
(柘植地区市民センター内)



発行日

令和七(2025)年七月一日(火)
電話 四五八八八〇 FAX 四五八八八三
〒五一九一四〇二

柘植地域俳句コーナー
仏壇に
光る櫓の
新芽かな
中西 澄子

令和7年度第一回「運営委員会」

6月20日(金)午後6時30分から、市民センターホールにて開催致しました。

宮田会長挨拶の後、主たる議事として、

①柘植地域まちづくり協議会に於ける組織改編について▼人権同和部会・橋本部会長から改めて趣旨説明が有りました。(本件に関しては先般の「定期総会」の第3号議案として、同氏から部会組織の改編(案)の提案が有り承認されております。)

改編内容は、人権同和部会と人権啓発推進委員会の統合に際し、部会名を「人権・同和部会(人権啓発推進委員会)」と改称する旨(6月12日の人権同和部会で決定)の提案があり、本日の運営委員会に於いて承認されました。

②「いがまち地区中学校区再編検討協議会」委員の件 ▼事務局長から経過報告

伊賀市教育委員会では、柘植中学校と霊峰中学校の統合に向け、当該地域との連携を図りながら、再編する新校区の在り方について協議すると共に、中学校の統合に伴う個別課題について検討する事を目的として

「いがまち地区中学校区再編検討協議会」を設置する事になりました。については協議会委員として、3まち各自自治協の代表者の選出依頼が教育委員会から有り、柘植・西柘植・壬生野の3まち共、まち協の会長が協議会委員に推挙された次第です。

③センター厨房備品「冷蔵庫」の更新購入に関して▼現行冷蔵庫が20数年以上経過し水漏れが発生。冷蔵・冷凍品の品質管理、食中毒予防の観点から部会責任者や子ども地域食堂運営者より至急の更新購入要望が出ており、本件審議。については令和7年度の伊賀市包括交付金で賄うべく(購入経費約16万円を捻出要)削減可能な部会費等の削減を各部会・委員会の協力を得られる様センター長からお願ひし了承されました。

④各「部会・委員会」に於ける活動進捗状況・今後の事業計画について▼第一四半期(4〜6月)終了時点での活動経過、及び7月以降の事業予定を各部会長・委員長から報告致しました。

令和7年度「臨時・総会」開催

「運営委員会」終了後の午後7時30分から

開催しました。「委任状」81通、本日の出席者45名(合計26名)(総会構成員46名/欠席者20名)議案は、先の「定期・総会」に於いて未承認で残った「令和7年度予算(案)」の訂正でした。修正箇所は、前年度繰越金



記載額の誤りと予備費が適正でない旨の説明を事務局から長お詫びの上、訂正させていただきます。きき手を以て承認戴いた次第です。

柘植小学校校門の『うつくし松』

養生しました

5月31日(土)午前10時から柘植小学校校門東側の『うつくし松』の養生作業を行いました。

当日は、樹木医で「公園・森林樹木コンサルタント」代表の西口麻代さんと夫の年幸さん、及び「うつくし松を育てる会」実行委員のメンバーで実施。作業の方策として、アースドライバー(土壌穴開け機)で根の周囲10数ヶ所に深さ50cm程の穴を開けて、土壌改良材の「木炭」へカーボンエースを先に注入しました。

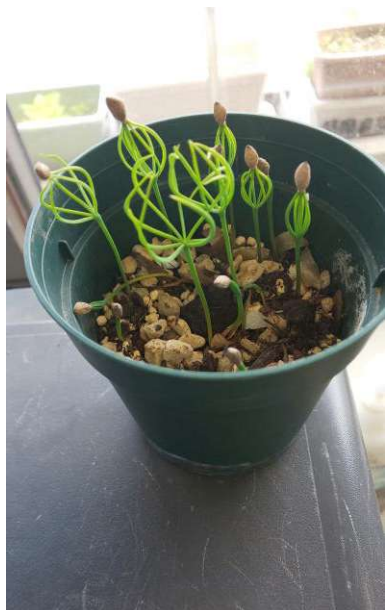
〔土壌改良作業 養生作業の様子〕



更に、地表近くの細かい細根に樹木活性剤の「南アフリカ産巨大海藻抽出エキス」〔ケルパック〕の希釈液を散布し樹根の活性を試みました。



発芽後2週間目のうつくし松／上町富井さん作



柘植駅前花壇 夏モードに変身

柘植駅の活性化、柘植駅利用客の増加を願って駅前の花壇整備などを通じて取組みをしています。6月7日〔土〕午前、産業交流部会員や笑みの会、有志の8名が参加し

マリィーゴルドとニチニチ草を植付けました。梅雨に入る前にできたのでホッとしています。この活動は草津線地域サポート支援助事業を活用しつ

つ産業交流部会や有志をもつて柘植駅構内外の美化などを不定期で実施。興味のある方は産業交流部会までお問い合わせ下さい。活動が決まり次第ご連絡致します。



『仏教講演会』(柘植仏教会主催)

【講師】鵜飼 秀徳氏

【演題】絶滅する「墓」～吊いの過去・現在・未来～

【講師・自己紹介】1974年、京都嵯峨嵐山の浄土宗「正覚寺」に生まれる。現在三十三世住職。1996年に加行(伝宗伝戒道場)を成満し、浄土宗教師に／僧侶・仏教ジャーナリスト。

成城大学・文芸学部卒／新聞記者・雑誌記者を約20年間勤める。2018年、京都の自坊に戻り、法務に携わりながら、本格的に著述業に入る。同年、一般社団法人「良いお寺研究会」を設立し「仏教界と社会の接点づくり」をテーマに活動を始め。大正大学招聘教授、東京農業大学、佛教大学非常勤講師。宗教社会学・死生学・寺院学などを教えている。

著書に『寺院消滅失われる「地方」と「宗教」』(日経BP)、『仏教抹殺、なぜ明治維新は寺院を破壊したのか』、『仏教の大東亜戦争』(文春新書)等。2023年8月『絶滅する墓 日本のはらたざる吊い』(NHK出版)を上梓。プレジデントオンライン、Yahoo!個人、JBプレス、京都新聞などでコラムを連載中。

【講演会要旨】「墓」の歴史は縄文・弥生時代から古墳の始まりから邪馬台国、魏志倭人伝に登場する様々な墓の歴史を解説。(世界三大墳墓は仁徳天皇陵古墳・エジプトのクフ王のピラミッド・中国秦の始皇帝陵を指し巨大墳墓として此れ等は規模や歴史的価値から世界遺産登録)天皇の「殯」(もがり・本葬まで遺体を棺に納め仮に安置して祀ること)も「薄葬令」(小

さな葬式・小さな墓)に依り簡素化の流れに。日本人にとって「墓」とは・江戸時代に庶民の吊いが定着。檀家制度と家の墓／幕藩体制のもとで「宗門人別改帳」(にんべつあらためちよう)が作られ江戸時代の人口3千万人の最初の戸籍となる。仏式での葬式で寺と檀家の結び付きが強くなった次第／火葬と土葬の歴史的考察・神道・キリスト教・イスラム教に於ける埋葬方式・明治維新以降の神道と国家権力／再び薄葬の時代へ。散骨(海洋散骨・樹木葬等)墓仕舞いも増えており、葬式の簡素化は止まらない。



そこへコロナがやって来た。長寿化しなければならぬ程吊いは小さく／東京・大阪ではビル型墓、名古屋ではLEDクリスタル納骨堂も。遺骨に高温高压掛け人エダイヤに／ヨロツパでは全墓地・埋葬数の半分がコンボスト葬(堆肥・土)に

なっており、将来「森」を形成する葬送形態。

《本日の講演会参加者数..70名》

仏教講演会

柘植仏教会主催

■ 日 時 令和7年6月14日(土)
開場 13:00
開演 13:30~15:00

■ 場 所 柘植地区市民センター

演 題 絶滅する「墓」
～ 吊いの過去・現在・未来 ～

講 師 鵜飼 秀徳 氏

※ 入場無料

柘植地区9寺院 柘植仏教会

【7月の主なイベント日程】

◆社会を明るくする運動「愛の資金」募金運動強化月間《7月1日～31日迄》

■全ての国民が、犯罪や非行の防止と、犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場に於いて力を合わせ犯罪のない明るい社会を築く為、法務省が主唱し、毎年全国展開している運動です。■戸あたり100円で100以上の募金をお願いしております。

(柘植地区に於いても現在12区の区長経由にて募金運動を展開中です)

◆令和7年度「夏の交通安全県民運動」

【実施期間】7月11日(金)～20日(日)

◆第27回「参議院議員選挙」

【投票日】7月20日(日)【公示日】7月3日

【投稿コーナー】

《随想》 『60数年前の想い出』

植木義信(下町)

勤め人となり、京都へ革靴を履いて通勤していました。その頃、国鉄京都駅や大阪駅構内には靴磨きの人々が居て、紳士や時には淑女が靴磨きの高台の椅子に座って靴磨きのおじさんに磨いてもらっている姿をよく見かけていました。

凄いな僕もいつか、あの高台に座って磨いてもらう身(?)になりたいなあと思っていました。一つの憧れであり夢でもありました。

それから数年後、靴が汚れていたのではありません。僕が、あの靴磨き台に座っているではないですか。夢の実現、あの憧れが現実になりました。ところが、この夢の実現なのに嬉しさや喜びが湧いてこず、逆に涙が零れてきたのを覚えています。なににな、これなぜか・・・想定外のことに戸惑いました。・・・僕のような若造が人生経験豊かなおじさんに汚れた足元の靴を磨かせている。なんや、この俺は。これが憧れていた夢の実現なのか・・・ああ情けない俺。俺は人間のクズだ。

靴を綺麗にしていただき高台から降りたら、おじさんが「お客さん涙を流されていましたが、なにか私に落ち度でもありましたか」の問いに、僕は「申し訳ございません」。

ちよつと思ひ出すことがあつて」と応えるのが精一杯でした。この後、「ありがうございました。」の言葉と共に代金に僅かのチップを渡してここを後にしました。

その帰路の列車では、憧れだった靴磨きのことと共に涙のことが頭から離れないではないですか。あの高台では若造が横着な。心の反省ばかりでしたが、ここにきて、おじさんは靴磨きが仕事なんだ。靴磨きを生活の糧とされているのだ。なんら僕は悪いことしていない。この若輩の僕も、おじさんの生活にちよつぱり寄り添ったのでないかとも考えたのである。わりきろう。の、結論にした僕でした。

【今月のラン】

デンドロビウム・ガトサンレイ



106年前の1919年に品種登録された交配種。ブドウの房の様に垂れ下がり気味に咲く大輪系のデンドロビウムは余り種類がなく現在までもベストセラーとして親しまれており、ガトサンレイ特有のハーブの様な香りがするのも魅力的です。【上町・富井さん提供】

★☆☆ 編集後記 ☆☆☆

水の奥氷室尋ぬる柳かな 【松尾芭蕉】

▼元禄2(689)年6月、『奥の細道』道中、出羽国(今の山形県)新庄を訪れた際の句。「風流」こと新庄の豪商「渋谷甚兵衛」宅にて詠む。青々と茂る柳の陰に清らかな水が流れる小川が有りいかにも涼しそうだ。きつと此の小川の上流を尋ねて行けば氷室に尋ね当たることだろう。(芭蕉46歳の作)

風の香も南に近し最上川 【松尾芭蕉】

▼同じ新庄の「盛信亭」で、同時期に詠む。(盛信は風流の名家筋に当たる)白楽天の詩『薫風は南より至る』を引用した挨拶吟。盛信の館の南に最上川が流れ、川風が折からの南風に乗って流れて来るので良い香りの風で心地よいものだ。

五月雨を集めて早し最上川 【松尾芭蕉】

▼五月雨は旧暦の五月、現在の六月で降り続く梅雨の雨を一つに集めた様に何とまあ最上川の流れの早く凄まじい事よ。日本三大急流の最上川(他は富士川・球磨川)の激流での川下り「水みなぎって舟危うし」と『奥の細道』に記され、その体験から、涼しを早しに推敲しました。〈清水〉